繡像優讐

岩見英雄録

四輯

二

2509
38-23

遠
2509
巻 35-23

昌平坂学問所

續本復讐英雄録四編巻之二

高足弟子 桂 精
一才子 晴 奏 捷

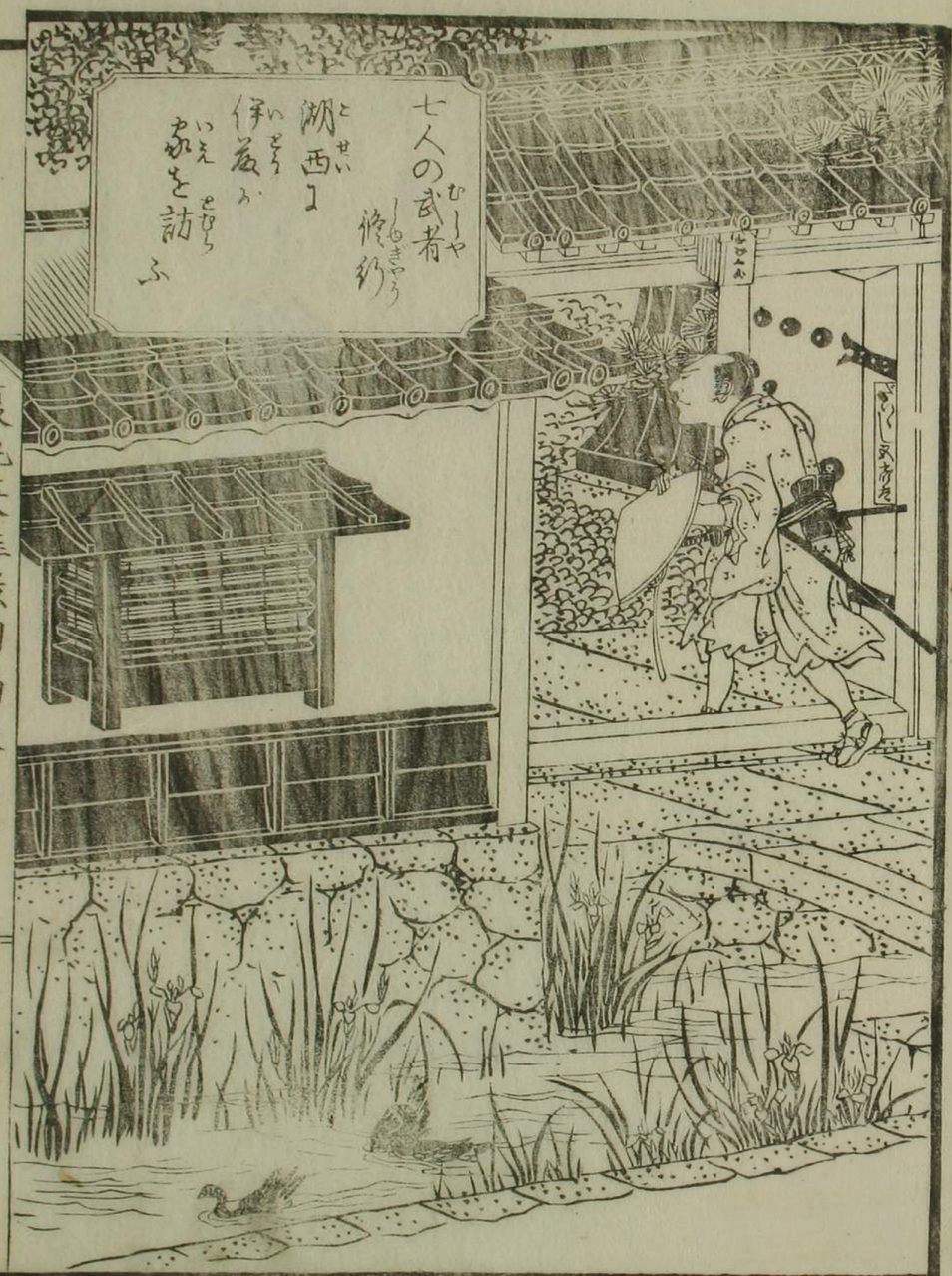
加藤桂松莊子儒先生の幸侍なる人生村松清吉更義蔭
が富和と碁を競めて二日三日を已しけるに義蔭が婚
ふなる清三郎義精い親毎に師伴義源が行る坂本
へ毎ふりのうち都に出まべ父義蔭と交ぐ桂松が例より
ありて先生師父に仕ることく先生が奴法を学
ん藤るおりに人猿のおを見へぬとて修て僕の臣
先生も清三郎うち性温厚にして才あるを愛めんど
こなげく僕の戈ふうまべ先生も方ところ怪りぬまで

村松父子の富をも熟上し雖て成名の要ひそぐ飛脚
まなる像くと傳て流してあるなん一日義樹に坂和
より例て呉りて帰る時候の言もく晩くさへあるを怒
為うる疾にて凝る血の痕黒むばりけるを案ずの
面をも拭を含みて帰るこぞ母の長江をうち着るより
こい清ろやを親の疾いいろこぞと甚く驚き同んを
もると父の義義をあらめとまくを精し元を武
義を学ぶ者の知るてい拙弱冠の時候多りとい汝
名い知恵遣こそ修行の勤者ろうと如くしく驚將
てろいと長江と絶て度とをせ清三郎いろへ来を
体ひく意を入くひそろくを訴由と同行を義樹に今日

坂和の事件ををく父子語りをを顕末を探を粤に説出
さん移行を赤坂を指時廣（旧い廣俗軍）横尾豎助（旧い成沈盛俗）天山双四郎（旧の名い持世）大川西太
を首として蓋石西郎太
郎を盛三郎弥三郎を金谷左五郎四郎後幸治渾て七蛍
の武者修行い伴義直添縁げ家宅をさして赴をを本日
大体の富を出る時の言も晩をうめまで坂和を入し比及い既
に疾艾不及ぶ移を接富を赤くを病八止西を八日を
西天不伴義げ富和を門をうをれで直い縁をくをを当
依く本入を義賢の勝命を辞ひまつを発をれ清郎
に幸来日来武を名誉の勇士すいをで汲引して仕度
さ世玉の言をも伝んと仏移せるれるを近江村松清変

義侯が消息やうて極密に庄屋を使ひ遣りて義先生の居
所を探つ人ども中と有所と云ふ所を尋ねて若者り且その義樹を
りて出産の妨ちなくば僕お使ひなく何候結るべしと言せ
なば直に殺べきを心を謝し出奥名・雪せめ乃ち来
させる為に結べきもの術を命の庇より行て約束に悩を殺て
久度まの場ごとり結ぐまを目指て癒りん形勢なるまべちろ
ろ山方より拒抗中べくん今の君の兄系の義を礼なる
事の多うまで病の癒り果んまを見じと思へ結に
いなで家人の流行に至さんを乎ん所れど拒て不変
財多の指ぬうまと言へ者り仏勇て断りまを勇の結なく
拒しも武者隠りの浮浪人七名汚ひ来まぬと雪えれば

非ずと答て命じて客庭に使ひ菓子等を賞給ひに
赤城名物ろろ財布を乞ろれど源俊を登時移部屋約束
ふい羅をめまでを経過傷ひ来る人て出ぬい不思し
と疾ひを努めく赤城て出く兄系ちろ行て赤城名物
財布の口紐五ふ果く試験のてを知をしべ直もそい
ちろくよりも能とふい行れ系を御家の病あり結癒
てらくども今ろ四約束ふ羅を作り不日して癒り果んふ
そまと結者の結をめろんて出帰りて七名ちと又部屋を
せて抗行ろんが若しうべ今一寡附我方に追返し
めへて片胸潜ふ内て右の身ふ強く設させ
酒者とそべ来まべ源俊を七名の者て結り一すべ巡る童


七人の武者
修行
湖西に
伊義が
家を訪ふ

天山弘吉
次左八の臣
赤羽の主膳
金若さひ四
郎の三十八
狩尾監物

を待あへぬ疾り果ぬ御疾の久尾う橋ど妻礼を焚しめの
色〻と弟子名子答意を伺ひ辞〻く席を疾りうう移べ
赤坂名士名の宴移らい伊勢を仙術術うて法師師の
の秘傷が撃ひと撲を試撃を知きて痛と託ろうや
移ぐと古角家の諸士と門人多〻と安などの志移うも
あしこい家屋く國名の礼始原それど此方を巨程士と
侮り自ら驕慢りて立ち会めう何ようまきを門人を親
青寺の藩士の多りまい事事の移を能〻知ちち
侍う本家〻ろ名字へて仕度の捷絶なんめりと合議れた
名く〻計算定つめまど漆縄こえく先を門人名と試
撃をううて漆縄い角と霊時聖度せ〻をもく御疾恢も

悩〻自ら立ち地へ出今だ弟子名ろうち仕さく赤坂
横尾名士名を浦武陽へ尋う〻む日裏つる身ふうい
幸待漢二是平長橋漂を所照家を月十ふ郎澄秋
矢走和田仲捷程日江荒田所財風安井紋麦有利三名
浦義人明熱三井律義色業平野田所弓長なんどうど
れさる此彼多くいこの田名なる〻士のみ牙なり中ふを月
十ふ漂秋と長橋漂を所照家い立長の牙みなりうまど
漆縄が血を切く方の拵揮を引り客待れ左注れ右と
二行〻別く立待者を拵〻なん有利く立神〻客待ふる
長郎三六〻伊義が戈子矢走和田助二義い完を嫁〻熱
と日江義田所立所を長い毒石ふ所を立安井紋を今客待

曰帰て幸橋渓二天山双曰前と高名橋秀人橋尾豊和
る三井伊義高渡い赤坂と猪と平野曰帰と法華と宗
めく変ろく〳〵竹刀木刀猪子猪あるも　竹刀猪子検各
自の腕を試ろく稽頭を変ろ試ろと伊茂が刻み有撃拍さ
者ろるも歌よい都よの腕珠精妙いうでう猪を撃ちべ
あろん連一連の列みを絶て撃ち撃頭られば赤坂い行て
ろんと倉矣て倉連い毒者ろ三四人も一育ろ立ろ立ろ立ろ
多財いあるは〳〵ろと徹る河ろ西雅し金月ろ長橋渓
ち帝我をちまてをを出金ろ法をう歌ようい不貴金で
偏名友人集ていんろ一ろ教へ申と立ちりをで撃をおも
せぐる赤坂財廣ちぐ〳〵ろろまを月も橋ろ猪ゲ腕珠

の木刀ろ撃体ろまろ西方げろ席を西して法ろろ赤坂
名ふたのぐくに武礼しをを事をい嫌貴し舞と計り木
客廊へ流ろ撃ち起んとする計財しも材松清三帝いと乾
宿所を出しうど半途なる志賀の里に不動ありてちち
より〳〵不云も時移り猪くに来りしう師い云ものよう
御痛ろ番義ろく童ろ里区流武場小木刀の智ろは
絶勢習撃のまぐ絶ろめと思ろ不行いなくて七人の
武者腕行と師象の我ろと試撃の時と岩ぐろ親と
てちろろ来りろをおろてよろと長橋渓ろ帝を月
十ろ嫌をぼ毒日ぼろ仏ぐる初度の生系いうとぐ中く
同ろくかどろ義拍を列産の友ろ言歌しつ半途の不

爵を除封して、仁愛を以て国を今に治りしが先生の子孫なるの
甚だ患の今も發りしとや元和のより蟄居のつゝ慎て
渇へやさぶ武士の所為の所業の奇くと試撃ゆるを
義を重ん仕んと為りしも浸まてく和を失くして
ふるゝ者人を以て対ふ到ひこのお年八寿侯の郷士
杖松氏のふ清之命義樹と呼まして亦是世師の門生
なり元禄ゆゑ年に在へど面貌優美なる廿年に在ける
りく好む武芸の稽古ゆる方角の偏名も寒く稽
まる本事あり列位の豪傑仕間紛りく一試撃ゆる
ゆゑ偏名ゝ幸と為ゆるんと中く義樹を地ゆゑ
悲嘆ゆ悔ゆ時ゆゆ肖ゆ汗流ゆゝ長兄

建須戴ゆゝ事に依り以議い発ゆゝ
困じて辞へど、寡酒く静まてゆゝ威儀ゆ
ゆゝ仁情と見ゆ無ゆ赤恥横尾ゆゝ
器野蕃石完ゆ今容者自ゆ名渇ゆる中ゆ
廣い蕃石ゆ盛ゆ祈ゆ村松生ゆ屋ゆん
一刀試ゆ人ゆゝ者ゆ名ゆ仕ゆ蕃石ゆ乳色
に清ゆ所いゆで乗ゆ出ゆ歌ゆ乳ゆ
なまゆ出ゆん仕ゆ乳ゆ乳ゆ
とゆゝ長橋ゆ月河新ゆ振ゆて今日ゆ生の疾
ゆく出ゆ出ゆ清武場の法事を指揮の我名二人和
及の事ゆを行ゆゝ試撃ゆゝ法嘉樂の刀法

されバ門人等ハ頻にぞ先生の志を継る武道修行の為なりと尊き情の斡旋を頼く和談ハ師範を背く志あやと互に代りて責るなどにて其身の者も纔に過なく父に孫ざりしかバ清三郎茂樹が日来年齢より抜志る本業あり術も温順の生質書遍りし紀廿年なりと平生に浮萍互に相落つて属て嘆賞せられ清る情を肉気に嫌し来きいひにて此武者修行の劉云に清三郎を主会なく打負るべ偏局の恥辱を分ち已は僕悩さまし態を見く後日に潤して復を慰ん若武者修行の一人なも敏捷ハ才前より勝うち負し面を繋しく起さんふちハ猿なる他人の揮りて角力に勿るべし何れに

撰のかゝさ術なりと明らくいふのぞ甲も乙も同心一致の理わり無さをとめに村松茂樹ハ彼ハ人々の會ハまうりせ清三郎ハ流の一派術の指南を願ひまつらんと座石に向つて来る辞儀の式礼事終りて取る庭の装束ち様に纏ぐ様の紐の爲さ経緯を統べる白き肌ハ洲べあざむく練貫の上に麻の皇衣に柳條の紋袴の後高く括り十八歳の優しくなる十六夜の月の面影なるを其の唇に斯鬢の艶やかなる顔ハあまで女子に笑ある勇士の眼ざし清くも竹刀提げて演武場の中央へむかふるこれハ才長三郎一流の暴撻庵石の郎左京盛ハ長の刻まさる小野子のいかづちの来やあるきも持く

長柄衛太郎
望十五郎
捫尾監物
村松義樹
暴雄を撃て
美少年
晴る旅
衆人乃
恥を雪く

赤沼り主膳
ざい石五郎太
伊賀門人們

と立腕ひ来りて者佐と撃上と撃入木刀をば内
一内と和一丁と撞出を小鬼刀の鍔目をく内めさくれば
亡霊い三人ぐろう浪ざ丸こ花逸巡罩を木刀を透さぬ義
樹粧撞着くろ所刀に刃作刀を見既まぐりうたみ水
陸い刃へぐりうれ

赤婦毒女お年を撃つ
邪松丹心勇士を進む

主院嘉石の帝を亡霊い俺り鞍さ義樹ぐ本事にん
ぜどうま者汁廿年く撃ぶ負うぐ亡のの俺い画録と
なりて甲斐なき悔あうんと男へぐいぐ酒気う汗を拭く
なうとに四へ流く虚やみうん花嘉へて撲地と撃ず力

を拂ふ間なくも疊彼岸より出ろを刻ーさ大分風交久
ぐ又交流を主柳のいと精悍入形の剣劫墨絵剣を制
ぐ形る今遠試撃の形勢に客佐古石の武者俗行も亦
見伊義ぐ才みを思ぐ嘗を吾孝又殊なを汗を拭る
まぐに務負玄麿と打鉦る一進一迅右尺横を矣ぬ清
三郎歌の壺吸と料り行く衛と跳入ぐう雷光石矢ぬ右
左ぐ右ぬの肩岩と刀寄言ぐ丁と撃ぐ碧く伊義ぐ
門生名行あうの砲を壺鉦ーさ日業れて精ぐる
ち後を亦て思ぐぐも一高呼くと唱来して散動行ぬ
面なくて悲憤ぐ言盃ぐ悔へ雑ぐる赤婦之宿天時に村
松生小徳ぐ仏合ぬ強務ぐまぐ卒財廣ぐぬの中を交て

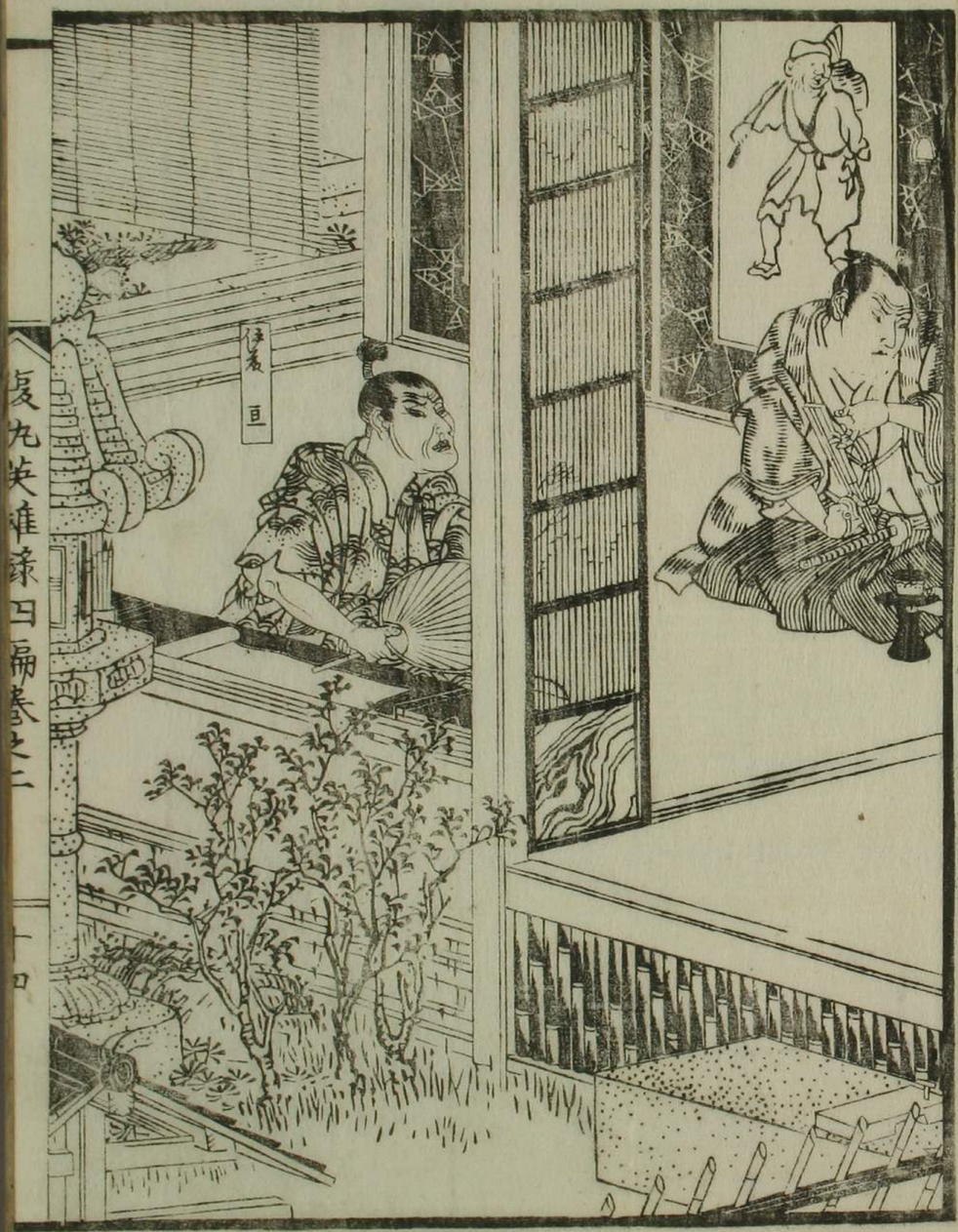
刀を振〻くり引き〻幸やあるとて置き敵ぞ三尺ゝ領まる
木刀を内ゝ遠もあるを敵の懐へ〻〻遅る電よりも疾き力
風ふき歩〻果く田の席へ出んとも言間も待までになく
揺せ〻清三郎又撃合を火玉の使働き術と遊き作
赤幡い撫尾軍成と肩を比べて敵ふるの撥聲絶まの夫さ
中幸に茂樹いうで欲きぐさ弓よの肩先ちく〻り撃れて
竹刀をうち粉却おく庭ふ着く素敵を又撃ちて木
刀の濃顔破まく〻因も時む痛と思りを押色む情紙て
茂樹を流ゝ血を抑ゆるを長弟ひさ〻赤幡財廣却食と
うち忘れの換傷い安仕上乱発〻ぬとなく〻のをわ
ゞゝ表ゝの裏毒石ふ所ちぐ為ゝも言〻頁板猪

解く一高く庭を紀つ武者陰紛い客廊へ引き入れ
衛を所鳴東十ふ浦秋安井幸時日江平殿も乱に
対私を魅め〻を行よく毒て清三郎未の下刻と及ぶ
辞〻て宿所へ帰りゝり有た右而茂樹い又清変と陣
赤よ別り〻より試撃果〻までの一條を藉ゝ細沢報るとび
茂義ふくゝも思い高まる由あまべ板を海げ神ゝ立ゝ〻
毒石ふ帰をゝ耳不熟ゝ氏ゝ〻ゝ毒七名ゝてまと
宛を惜ゝ恩ゝの者もあるゝやゝ〻三日我者涙ゝ
和未へ帰る和中ゝて温めゝる浪人も七名ゝて毒石宛を
と〻〻ゝ人もを中ゝあるゝと毒の幸穂松荘ゝ湯
光秋ゞ暴を清め〻ゝへを言ゝと若ゝ〻ゝ彼穂松

氏い名を衒ひ袖を濡る性なりねば彩うゝ伊勢の海の波
もかぞ船中のものどもを呼をみつゝ沙汰しあへそを我
も僕演七も聞ハて狂しく甫にせ〳〵を演七さへ元実
人ゝあるに人今さゝのもを出ぬ女まを知つゝ武者隠り
も必皇桂雲大人ゝ嫌さんし〳〵業の如何も私の役目を
清く自名の小浦を知く扱扱知へ来りしなるんさんれど
今海ゝ皇　赤姫ゝ母ゝんが拳動とのひ船中のる体名
人とい知りゝんれど清ど之の稽きゝんで伊義先生も性
華の性なゝよび粗忽の計ひいあるゝ人ゝれども人と知る
に為うる時長り〳〵強く鍛伝く木戦喪ゝ萬拳のゝ
りひゝべ断るゝ知ゝ出来ゝ〳〵見い只海が新ゝ

備〳〵詳の小幸にあるゝ伊義大人を揚て吉量
せんゝ海い桂杉氏ゝ我の緊要の意ゝてそれをり
出ゝく若て勢ゝ弟〳〵せゝと抱手て毒の長江が出来ゝ
扱知へ為ゝ知ん要あまゝ演七に体の準備をさせゝ
俗〳〵きゝく身を記〳〵衣紋文て袴の紐結ひも敬ゝ
出て財を移ゝ伊義ゝ列ゝる原来頼〳〵同ゝ
ゝゝたに直ゝ便宜ゝ入り安雪を同つ已ゝ跡事を謝〳〵
なゝゝも海絶ゝうち教ひてゝ日より拙れを紹介せん
為ゝ義ゝ〳〵ことを謝〳〵…且彼武者修ゝのゝを清り
出ゝをゝん門人名階打頭〳〵中に独り会ゝのゝその
一人ゝ捷ゝ清ゝ教ひゝ赤姫ゝ為ゝ接頭ゝ

と云て陸嘉靖の子那赤城を始め孰も英雄の李卓
あり。されど此等は不日に咱等親しく識し上意の姉妹
必術ある御用に立べき者なれば篤に以是を彼り志郎に
まる巨鶯挙んと思ふなりそこと語るに於て清秀清く
座側の人を屏け継澄て当日此中まての及び今日
清三が荒樹が趙を破りし赤城が無法を仔細に告て
且つ彩一般の安いうで太膳の君子なりんと牢済経を且
抑ころき且喉く我今終りの七人に対面せし時相貌兇悪
の者或は面に瘢痕あるものも無ありあら猶ども人なりち
をるく取捨るべかりしは況や今戦国の世武功拗激の士は
面も全顔も瘢多かり縉紳浮屠あるひは市人婦女抔に
較さん中と憚むところも無りしは幾許るり且今忽乃備
ましとは知らざりし遠く孫門生の後まて来る人と議
うるも告ぞ計らひしを以て柔が罷きんを悼りて俄うち
負しとのことなり紀遠の亦咱教への厳なりぬ故にあらそと
いひも敵ぬに村松茂蔭吾賊息が底は些お分りよしや
童児瘢ありとも太刀を帯る者平生の覚悟を何ぞれ
悔ん僕徒に訪ひまつりしは別に紫要の一條ありそれ不
ろうじ既に同今稟志し如く那一般の案内者の人と
そ号へ思を揺らく先生の推挙もあらんに偏辯粉紛を
もりて君長に媚び君発迹日もあらば猪園の嘉害と
成ん然を定て渠等も鈹の士を掘らせの時と先生勇


伊義亘

村松茂義
心事を
亘紀經り
織る
村松茂左衛
おき見
下女

士を薦んと欲し郡を広めて治うるかゝん暁に門生高
弟捷し家を流ふ去しめば吳目敏の学ぶ所こゝに
あゝんと中解に投熱西呉樂名ようう退遜さんこう試験
江夏せる和に御区柔方に抑留せ一極玄莊元清光紀が
和事に来ぐ刃ぐれども僕数日借に誠うに流蕩みて
物に親ぐび業利を惹うび且天下を周遊て保に揚まる
人あゝぐ恵に使ぜんと言り遠い名を示ぐび実を求ぐび
志しうぐし学く而是迦の及ぶ所数多のゆゑみて其
規程則去を同試を僕ゲ刃は学りつる而いひそうに
もの合ちうに偽うぐさうるに狂揚まる者の学ふちて
今に孤独なるとゝく知まり実に一人百千の後傑に

ちうそこ要見の意義みゝあうぐ生多時紀の幸にみぐ
学試を国より志むれの知を稀むべくもいぐ
歓ひて七名猪頁い論て計ら雑う事あうまど方に
うち頁知とい見へうぐ幸呉く海この人を推挙あうん
を泳に鍛のは石に干城の士うぐ先生のうちといめ何の
思しのみて老実者の肝腸を吐露しう細論に亘い
熱沢味を愛ひて学を求け学をむう情熱は色
も俺も仕籍に登うぐとうに強うん紀うべき
程なぐう学見の素ゲ猪挙あうんを高り大吉又極松
氏と友遠に達そしめんと手るい皆人のみみうく世のれを
厳ぐ刃友恒の事さうと今の世に意ぐ見いうま七

鎌の武者源頼朝と極松氏と戦場の「孫い」高名ありし事
なりしを鎌の近習建部源八秀明と年来武を嗜み系
図に載せしまゝ来る十日より我方へ移りくせりまいそ
れ」と宛竟なり彼人い源氏の末裔昌の二男にて兄
大内義弘廿蒲秀沙弥い善作山蒲生の孫嘉吉の孫
ごく建部姓へ日本武尊の御末裔にて大上総介と祖を世る
おりする中い姓氏源も乃人へ「ら」紀乃中家作、未家
より建部氏を嗣をめへ「ゝ」ゝ今い鎌の門家に列なる
羅宿をれば廿人に義に法己その侵略を目撃させない
矣日の仮強ようべと高麗侵まべ義経の強烈候ゝ
ゆりなる時に自伊義を御疾頼る時「に」うべ客屈にい

ちり為め垂し赤堀名ちにひに征服をして従家がれ
鎌浜ゆ一人の武者源頼朝極松氏甲冑を乃に来りしを
彼家系が御疾を知りをいくに留め垂んより移りに
明日本国寺の一羅宿家方へ来時ある紙もって伴の極松
家甲を拝さ法名を三今せひそりに法豪傑の陽森
しめ本年の行を彼羅宿に脇一うべ一奥をりんにいり
ふ遠を義清ゆん中に言にちるさい涙りに私を浮ろ世ひ
世のく矣飛に及ぶ移べ直い歌べ度を紀あとに七人を
ひをあつめて高量」時るより家く我米を答意ちる
南氏の門人を多く移に頭しゝりを主義い嘆る色にる
く今又ちるく世りひをを思維に大ほりて世ゝくたが

そゞ技倆まゝ武士を六角殿へ仮りちんぎなるべきを
いうまゝ伊賀氏の紙を携へて發途仮宜なれとて屋ゝて
皇月十四日ゝ漸經ふ時ゝ旅の芳情と歌び明日い
國寺の法肉人なる肉食の来りのゝ〻ゝ〻ゝ
伊給設の多事ゝんゝ偏者教人留連も〻〻の〻〻歌び
極富へ正ゝ〻ゝ〻ゝ及ゝ〻ゝ〻ゝ推系結ゝんと〻〻の
あ亭の家号なんどを嫁して生一世ゝ苦ゝ謝一つ
打つまて筒の極亭へ地りゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ松い清
三郎義樹が新ゝ疲ゝ〻ゝ〻ゝ由ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
清ゝ〻ゝが坂ゝより帰ゝ来ゝ来明日行義を訪ゝて彼七
人と祇園のゝを洗ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ義使の荘ゝ〻ゝ光教

世ゝ〻ゝ撰ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ七人の武者陰ゝ〻ゝ〻ゝ
岩ゝ嫌ゝ一戦ゝ〻ゝ偏遠般い本事ゝ〻ゝて能
までに懲ゝんゝのゝ〻ゝ〻ゝ大獲不歓ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
〻ゝ居ゝ〻ゝ

繪本復讐英雄録四編卷之二終